生まれついての

須江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生まれついての

【Ｎコード】
Ｎ８９１４Ｉ

【作者名】
須江

【あらすじ】
アメリカのどこかにある巨大な街、オデッサ。とある暗黒的組織に雇われている訳ありの日本人、ＣＮジュノと、ＩＲＡ出身のスナイパー、ＣＮキャロルの日常生活。ＢＬ注意。

サブタイトルはお題を基にしています。お借りしました。
「ｂｉｔ　ｓｔａｒｔ」さま：ｈｔｔｐ：／／ｍｚｔ．ｎｏｂｏｄｙ．ｊｐ／ｂｓ／＃

季節はずれの蝶

そこそこ値の張ったステンカラー・コート。
はき慣れたジーンズ。
磨り減ったスニーカー。
どれも床にこびりついたスモッグで汚れている。
けれど夜だから見えない。見えなければ気にならない。濃紺色の闇と溶ける白い息以外に身を取り巻くものがないことは幸いだった。自分が見えないということは、他人にも見られていない。紛れることの大切さは、今までの経験から百も承知である。今回も、場所としては完璧。ぐるりとあたりを見回しても、昼間たむろしている烏の姿さえ見当たらなかった。
安堵を覚えていいはずの場所なのに、こんなにも悲しい気分になるのは何故だろうか。
不動産とよく分からないマネージメント会社が入ったビルの屋上、劣化したアスファルト防水の上へ腹ばいになり、キャロルは眼下できらめく街の光を眺め続けていた。

かれこれ1時間近く同じ姿勢でいるため、肩は痛むし腹も冷えてくる。高層ビルの林立から少し離れた場所にあるせいで周辺に遮るものはなく、背中に、頬に、押し付けるような北風が容赦なく吹き付けられていた。短く刈った黒髪がざわめくたび、皮膚の間でこもっていた熱が逃げ出し、首筋にまで寒気が降りてくる。マフラーではとてもカバーできない。赤くなった鼻ではなく、唇からばかり息を吐き出すことで、顎のあたりまで強く巻きつけたカシミアの温度を保とうとする。全ては所詮、無駄な努力だった。シャツを一枚、更にセーターとコートの重装備にも関わらず、リアルＩＲＡの一員として車爆弾の設置に勤しんでいた頃、イギリス軍に撃たれた肩口の

傷が痺れるような痛みを発している。暖かい風呂が恋しい。ネオンサインの黄色い光は見かけこそ華やかだが、暖を与えてはくれなかった。

クリスマスまで、あと指で数えるほどしかない。敬虔なカトリック教徒の家庭で育ったキャロルはアイルランドを飛び出すまで、派手なクリスマスパーティーというものを経験したことがなかった。街を歩けば目に付く様々なデコレーションと、降り積もる雪と同じ色をしたクリスマスケーキ、大きな荷物を抱え嬉しそうに歩く買い物客の姿は、あくまで別世界のもの。父親と喧嘩をし、組織にもぐりこみ、酒と女に溺れていた日々の中でも、聖夜には若干大人しく、ボスの家でチキンをつついていたはずだった。

だがプロテスタントばかりのこの国は、さすがアメリカン・ドリームという言葉を産んだ場所だけあり、神に対する感謝の気持ちなど持ち合わせていない人間ばかりが寄り集まり、浮かれている。当日までの勢いがデクレッシェンドな自らの国の風習よりも性に合っていると、彼は甘んじて喧騒を受け入れた。

何よりもありがたかったのは、辛気臭いミサの後、その年に行った悪事を残らず吐き出すよう神父に強要されずに済むことだった。厚顔なふりをして、実は人一倍羞恥に敏感なキャロルは、しらふの状態で人に罪を告白するなど、舌を噛み切る覚悟を以ってしても不可能な事だった。一度本当に家のワインをがぶ飲みし、酩酊状態で祭事に出席したため、帰宅後父親にしたたか殴られたことすらある。

信じ込んでいた大義に振り回され、無益な殺傷をした。惰性の関係に溺れ、何人もの女を無残に討ち捨てた。２７年間も生きていると、人に語りたくない事もたくさん経験する。そんな事情をさっぱり汲

んでくれない神は意地が悪い。堂々と声に出して言う事は、長年の刷り込み教育のせいで憚られたが。
死ぬ前の一度くらい、恥を掻き捨てる余裕が出来た暁には、懺悔くらいしてもいいかもしれない。全てを告白する前に事切れるか、もしくは教会なんぞに行く間もなく、ある日突然誰かに命を掠め取られるかもしれない。そんなことを考えるのは、やっぱりまだ怖いからだと、自嘲は幾らでも湧き出てくる。掴まれて捻りあげられたかのような胸の痛みを飲み込んで、無理やり口角を持ち上げれば、寒々しさが余計身に染みた。見下ろし続けていたはずのきらめきは急に遠のき、広い屋上一杯の闇が心にまで忍び寄る。

掠めたものは、寒さで麻痺した頬にもはっきりと分かるほどの強烈な違和感と鋭さだった。耳鳴りのような風に乗って、薄茶色の屑が飛んでくる。袖口に落ちた小さな塊に眼を凝らせば、破れた紙片のように見えた。冷やさないようにと買い込んだ牛革の手袋越しでは動きが鈍く、前歯で中指を噛んで脱ぎ捨てる。途端に訪れた冷気に少し身を震わせてから、彼は黒いコットンの上に落ちたものをつまみあげた。途端、それはぼろぼろと崩れ落ち、雨雲を呼ぶ強風に攫われるまま、左斜め前にそびえたつ、巨大なカメラの広告に向かって飛んでいった。親指と人差し指をこすり付ければ、一本残っていた触角と、指の腹からはみ出していた羽の残りも遅れまいと逃げ去っていく。
下から吹き上げる明かりに鈍い色を与えられて輝く燐粉だけが、指先に残る。早くも凍え始めた手では何の感触も感じることが出来なかった。

歴史はみんなうそ、去っていくものはみんなうそ、明日来る鬼だけが、ほんと！

「なにたそがれてるのさ」
軋むドアが閉じたほんのすぐ後、傍らに腰を落としたぬくもりは、余りにも説得力がありすぎた。
「いや、こんな時間にたそがれるって言うのも、変かな」
「最悪だな」
頬杖をつくキャロルの掌が白く浮き上がり、何にも覆われていないことに気付いたのだろう。ジュノはアジア人特有の無表情を僅かに顰め、放り出してある手袋を拾った。
「撃ち損じたらどうするんだ」
差し出された手にぴったりとした革を被せてやりながら漏らされるため息は、自らの吐息と絡まって天に昇る。触れた手は、色違いの皮手袋に覆われていたとしても、温かさを確かに伝えてくる。これは間違いなく現実のものだった。
指の股まできっちり嵌められた途端、離れていこうとした手首に指先を引っ掛ける。怪訝な表情に、大きな黒目をぴったりとあわせる。
「ジュノ」
少し下がり気味の口元からそれだけ言い放ち、後は様子を窺うのみ。相棒の勘の鋭さは熟知していたので、期待にこたえてくれる事は分かりきっていた。気まぐれなのは玉に瑕だが、それでもいい。実体のあるものに頼れることがどれだけ幸せか、殆どの人間は知らない。

しばらく眼を逸らすことなく見つめ返していたジュノは、やがてその女性的にさえ見える官能的な肉厚の唇から、一際大きく白い水蒸気を吐き出した。屈められた背中にこたえようと、キャロルも精一杯身を乗り出し、顎を持ち上げる。そういえば今朝は髭をそり忘れていたと今更気付いたが、幸い気分がよかったのか、ジュノは文句を言うことなくキャロルの唇を割った。上顎を彼の薄い舌が辿る感

触に、収縮していた背中の筋肉が脊髄に沿って緩んでいくのを、キャロルははっきりと感じた。
小さな吐息に満足し唇を離した後、ジュノはキャロルの頬に指をあてた。
「埃？」
とろりと水分を含んだ瞳で彼を見上げたまま、キャロルは頬骨を辿る指先の感覚に酔いしれ続けていた。ますます赤くなる場所を、力ない首が揺れるほど擦られる。相手の瞳が恋人の目から、いつも通りの優しい軽蔑をこめた色に変わったさまを見て、少しだけ落胆した。
「仕事が終わったら通りを歩くんだ。あんまり汚すなよ」
「げ……マジかよ。車待機させとくって言ってたじゃねえか」
「この時期だから無断駐車する場所もなくてさ。パーキングは２ブロック先だ」
「最悪」
すっかり汚れたコートを眼だけで示せば、ジュノはもう、うんざりたと言わんばかりの顔つきで首を振っただけで、何も言わなかった。

照準器を覗き込み、再び手袋を外してしまった指先に息を吹きかける。陸軍横流しのＭ２４Ａ１を構え、渋滞の続く通りを観察し続けていれば、横からクソ真面目な声で来た、と呟きが漏れる。
「あの黒いベントレー。後部座席に一人でふんぞり返ってる５０絡みの男」
ジュノが眼に当てる双眼鏡などなくとも、夜目の利くキャロルは既にその男の姿を視界に収めていた。
「何したの？」
我ながら馬鹿な質問だとは思いつつ尋ねれば、案の定感情の篭らない答えが戻ってきた。
「さあね。俺たちには関係ない」

「そだな」
引き金に指をかけ、癖で下唇を軽く噛む前に、謝罪の意を込め返しておく。
「アホそうな顔してやがる」
サイドガラスを蜘蛛の巣状に代え、はっきりとしなくなった視界一杯に赤い血が撒き散らされるのを確認してから、キャロルはぬくもりを持ち始めていた腹を上げ、身を起こした。隙間へもぐりこんだ冷たさは不快だが、隣で立ち上がろうとしかけた体温が、少しだけ和らげてくれる。手袋を嵌めなおし、汚れた指先を隠した。先ほどはあんなにも堂々と見せていたにも関わらず、今になって晒すのは、妙に恥ずかしいもののように思えた。

「なあ、今日、シックなレストランで飯食いたいんだけど」
相手の灰色をしたトレンチコートに汚れがつくことなどお構いなしで、空いた腕を絡め身を寄せる。反対の手に持つ銃を収めたアタッシュケースで何度かつついてやれば、ジュノは心底鬱陶しそうに首を横に捻じった。自分よりずっと体格もよい青年に、同い年とは思えない冷静な瞳を向ける。
「おまえのせいで俺も汚れたから、今日は部屋でチャイニーズフードだ」
「着替えてからでもいいじゃん」
「面倒くさい。寒い中また出て行くなんて、狂気の沙汰だ」
「それじゃあ、いいけど。2丁目の角の蝋燭屋寄れよ」
「なんで」
「キャンドルサービスって奴」
しつこく食い下がった結果、肩が竦められる。
「変な奴」
横顔が笑っていることの幸せ。
足元に見える階段を降りきったら、また一般人の顔をして雑踏に紛

れなければならない。明るさは違えど、それはこの暗闇と何一つ変わることがない。それでも、さっきまでと違い、薬でも打ったかのように気分が高揚しているのは、顎を凭せ掛けることのできる肩があるせいだった。

あと少しだけの距離だと掌を伸ばせば、拒絶はされない。眉を顰めるようにして笑い、キャロルは冷えた頬を少し低い位置にある、触れ心地のいいウールの肩口に擦りつけた。ぬくもりが戻ってきた事で感じるざらついた指の感触は、もっと分かりやすい相手の指に絡めとられ、すぐさま気にならなくなった。

＊艶やかな朱

今日は朝から表の仕事やつまらない事についてクライアントと話。昼食。２時半にボスから電話が掛かってきてホテルでお茶。自宅に送り届けて家でぼんやりテレビを見る。
夕食の後は女友達から電話。彼氏が冷たいらしい。一週間前の夜、あたしとスチュアートがバルカディアに居たって言うのよ。酷い誤解だね、と相槌。あの日は僕とデュプレクスに居たじゃない。
何か適当に話したけど覚えていない。すぐに電話を切った。途端、今度は携帯が鳴った。この番号を知ってるのはボスと、もう一人だけ。

「ｈｅｌｌｏ？」
「ジュノ…？」
「なんだよ」
「俺、死ぬ。本気で死ぬ」
「じゃあ死ね」
「もうだめだおしまいだ、今すぐ来てくれ」
別にキャロルが死のうが世界の大勢に影響はないはずだ。でも。
俺はお人よしだから、ブチ切れ寸前の心をコニャック一杯で宥め、ビュイックの鍵に手を伸ばした。

夜１１時のハイウェイを１３０キロでぶっ飛ばし、州境を越える。あのくそったれアイリッシュは今ハリウッドの高級ホテルに泊まってる。先に行っとけって指示したから。でもあんなホテルにとまるなんて。金の割にはサービスがなってない。そんなこと気にする奴じゃないって知ってるけど。

ビュイックを従業員に預け（非常に不安だ）俺はネクタイを引き抜きYシャツのボタンを二つあける。クチュールのこのスーツは、小物一つでカジュアルにもフォーマルにも使えるからとても便利。今度のカタログで見た新作もちょっと洒落たグレーのダブル。近々注文しなきゃ。
ドアマンに見向きもせず、さっさとフロントに向かう。中年のフロントマンは心得たように、２３階に
向かうエレベーターに案内する。最近調度品を入れ替えたらしい。まぁ、前のよりはマシか。
新入りらしいボーイをエレベーターの中に追い返し、言われた部屋に向かう。そこそこシック。しかし、それだけだ。こんなところの夜景なんか見たところで面白くもなんともないだろうに。なんとかと猫は高いところがすき、ってわけか。

部屋の分厚いドアを叩く。閉じたまま。もう一度。今度はほんの少しの隙間から、黒く潤んだ瞳が覗いた。俺の目とそれがかち合うと、すぐにドアは乱暴に開かれ、そこには絶望的な表情を浮かべたキャロルがいた。
「ジュノ。マイブラザー。おせぇんだよ、今手首を切ろうって思ってたとこだ」
「いっそ切ったほうが世のためだったのに」
「お前の名前血文字で書き残して死んでやる」
腰に巻いたシーツを引き上げ、キャロルは唇を尖らせた。また女連れ込んでやがったのか。肩越しに後ろを覗くと、ベッドに女の姿は居ない。ただ。血がとんだベッドカバーがくしゃくしゃになって落ちていた。それに、ぱらぱら散らばっているのは…髪の毛？ブルネット。

…女、連れ込んでたんだよな？

俺の手を引いて部屋に入るキャロルの背中に、巨大な蛇が一匹絡んでいる。色白の肌に真っ黒なタトゥはよく映える。蛇は男根の象徴だっていうから、いかにもこいつらしい（本人は知らないだろうが）

ベッドに座り、情けない犬の頭を撫でてやる。

「で？なんで自殺しようと思ったんだ？」

シーツの上に転がった剃刀をさりげなくサイドテーブルに乗せる。キャロルの腕にも腹にも傷跡はない。なのに、まだ濡れた血がついているのは何故だ？

「三日前、俺のとこに女が来てさ。家族の仇、とか言っていきなり銃を突きつけやがるんだ。いつか俺が皆殺しにした奴らの生き残りか何かだろうけど。殴ってヤって、バスに放り込んであるんだけど、そいつ見てたら、なんか死にたくなった」

「…さっぱり意味がつかめない俺は馬鹿かな」

頭痛がする。とてつもなく狂った言葉を紡ぎながら、それでもこいつは子犬のような上目遣いで俺を見る。洪水のような潤み具合。間違いなく何かおかしなモノをヤってる。

「なぁ、３Ｐやらね？」

「やるかアホ」

こいつのケツにキスするために俺は一時間半も車を走らせたのか？本気で殺意が芽生える。

「あいつ、いい感じだったけど」

「そういう問題じゃなくてだね」

そっけなく言うと、奴はベッドに寝転がり、崩れた笑顔で目を細めた。唇から赤い舌が覗いている。幾らなんでも赤過ぎる。よく見れば、口の端に血の染みが付いていた。

「口実なんて幾らでも作るって」

ため息しか出てこない。

「とにかく汗掻いた。シャワー浴びさせてくれ」

靴の中に靴下を。すべて、俺が決めるんだ。こいつを犯すかも。ほっとくかも。それを承知で俺の思案を伺うように、欲まみれの目つきで見上げてくる。
「女居るけど、気にしなくていいから」
「気にするよ」
つまらなさそうな顔でキャロルは立ち上がり、バスルームまで歩いていく。途中でシーツがずり落ちて、バランスの取れたバックヌードが薄暗い照明に浮かび上がった。こいつ、わざと見せ付けてやがる。

後についていくと、女はバスタブの中にいた。いや、女って言うより、少女？１５、６にしか見えない。柔らかそうな上腕筋に幾筋もの血の跡が浮かび上がっている。左手に掛けられた手錠を眼で辿ると、反対側は蛇口に引っ掛けられていた。傷だらけの手首。相当暴れたんだろう（当たり前だ）まだ未発達な胸や薄い陰毛。アナルに突っ込まれたバイブの音。焦点の合わない眼。
硬いものを踏んだ。顔をしかめ床を見ると、白っぽいポップコーンみたいなものがたくさん散らばっていた。
「何これ。歯？」
「フェラさせるとき噛まれると困るだろ。スピード飲ませてぶっ飛んでる間に、三時間かけて全部引っこ抜いた」
注意すると血がこびりついているのが見えるだろう。バスの隅に転がったペンチ。
軽く地獄絵図じゃないか。
足で歯を払いのけ、スーツを外に放り投げる。キャロルが口笛を吹いた。後で全部ハンガーにかけないと。

血のべっとりついたシャワーヘッドから、それはそれは綺麗な水が

噴出す。そのあいだに、キャロルは床に座り込み、こちらに向けて大きく立膝を割って見せた。
「なに、サービス？」
「退屈なんだよ」
シャンプーを絡めた人差し指で、アナルをゆっくり撫で回す。
「随分緩そうだけど、誰かとヤってたわけ」
「ＦＵＣＫ、俺、アナルの純潔はお前に捧げてるんだ」
至極まじめな顔でキャロルは言った。俺に処女願望はないよ。おかしくて笑うと、また唇を突き出した。
疑うのも無理ないだろ。だって、撫でただけで入り口がぱくぱく開いてやがる。
乱暴に人差し指を一本。クチュリと粘質的な音がバスに響く。違和感に太い眉を顰める表情は実はとっても扇情的なんだな、これが。
そんな事思うなんて、我ながらいかれてると思う。
湯の熱気に当たったのか、それとも違うのか、頬を紅くして、脇からもう二本一気に指を足す。
背中が反り返り、バスタブに凭れ掛かった。ずるりと滑りながら、それでもキャロルはこちらを向いて
ニンマリ笑って見せた。
指が出てくるたび、真っ赤な腸壁が引きずり出されてよく見える。弾けた柘榴みたいな色。こりゃラリーフリントもびっくりだ。激しくかき回したり出し入れしたりしながら、キャロルは断続的に喘いだ。
それをじっと慈愛を含んだ眼で見守るのが俺の役目。俺が言うまで前立腺は触らないってのが泣けてくる。
足の指先が伸びたり曲がったり。あいつの息子はもうどろどろ。何年やってるか忘れたけど、こいつ、
アナル弄っただけでイけるようになってるはず。とどめは俺にしてもらいたがるけど。それまでは我慢の子だ。
じっとこちらを値踏みする視線。それを無視し、シャワーを止めて、

バスタオルを腰に巻く。
安い綿のタオルは下半身に突っかかってちょっと痛い。
左目からぽろんと水滴を一粒落としたキャロルの手を引っ張ってやるのは慈悲だ。
「あ…まった」
俺の腕にすがり付くようにしながら、つぶやく。
「風呂場でヤるのはダルいからやだよ」
「ちがう、こいつもつれていく」
ほんとにする気かよ３Ｐ。
石鹸箱の中に入っていた鍵で手錠を解き、少女の腕を引っ張る。バイブがずるりと抜けて、バスタブに
落ちた。
「スパルタ方式に仕込んだから、絶品だぜ？」
「軽く児童ポルノ法違反だなこのロリコン野郎」
「言いやがったな！こいつと俺で交互にしゃぶって１０秒でイかせてやるから覚悟しろ」
口ではえらそうなことを言っておいて、腰が抜けてるんだから説得力がない。

くらげみたいになった二人をベッドに放り出し、バスローブを羽織る。これは礼儀。
ベッドヘッドに凭れて、サイドテーブルの上の箱を取り上げる。ゴディバのチェリーブロッサムボンボン（出来たらピーチシュナプスの方がすきなんだけど、あれは限定品だから仕方がない）泣き落としで聞かなかったら物をやるって？ガキかよ俺は。一応お前よか３ヶ月年上なんだけど？
もっとも好意はありがたく受け取っておく。控えめな甘さ。一度食べるとスナッキーなんか二度と見たくなくなる。
「あち…」

自分の身体の効果を熟知しまくっているキャロルは、まだ水滴の乾ききっていない身体を引っ張って俺の隣に座った。だらりと伸びた脚がこれで四つ。
こいつと並ぶと、俺の貧弱さがはっきり分かるから正直楽しくはない。元サッカー選手って経歴詐称が堂に入りすぎてる、きっちり筋肉の付いた脚。俺のスラリズムが悲しいくらいに際立つ。
俺は何も喋らない。ただ二つ目のボンボンをつまみあげる。そしてうんざりしている。
それをわかっていても、こいつは敢えて俺の肩に濡れた髪をこすりつける。
「俺も食う」
「どうぞ」
箱を差し出した左腕をつかまれ、そのまま顔が急接近。大口開けて噛み付かれた。情緒もへったくれもない。知ってる。あつかましく舌まで突っ込んできたので、チョコレートごと押し返した。口中に塗りたくるみたいにして舌を動かしていると、いつのまにか回ってきた腕が肩を締める。首がへし折れそうになる。こいつ、キスばっかり無駄に上手いから、先に鼻声を出すのはいつも俺。でも、唇を離した隙に、こいつの目が涙でぼやけてるのも確かだから、まぁいい。
「こんな夜中に不謹慎だな」
「夜中だからじゃねえか」
シャワー浴びたばかりなのに少ししっとりしてる胸に手を滑らすと、今度こそ鼻声で鳴いた。
「あー…お前が女だったらよかったのに」
触れているだけで一切動かさない俺の掌を掴み、左胸に移動させながら、キャロルはふざけたことを言った。
「女だったら、いっつも隣において可愛がるのに」
「お前が女だったら、俺は極力近寄らないようにするね。こんなビッチ、おことわりだ」

はは、と気の抜ける笑いを漏らし、俺の太ももにまたがる。重い。
「さわって」
被っていたシーツを肩からずり落とし、潤んだ眼を向ける。泣きそうな顔。
上から下まで見ていると、焦れたように顔や頭にキスしてくる。添える手が震えているのが、こっちにも伝わった。でも俺は、そんなに優しくない。
「自分でやれよ」
人の唇を撫で回していた指先を舐めてやる。びくんと身体を揺らし、眉を下げて見つめてくる。
黙って見ていると、しぶしぶ濡れた指先を自分の胸に伸ばす。興奮してたってる乳首を弄ってる姿は哀れっぽい。平気な顔で死体の肝臓を抉り出したり、いたいけな少女の歯をペンチで引き抜いたりする男にはとてもじゃないけど見えなかった。

倒れ掛かってくるのを抱きかかえたら、おったててるのがすぐ分かる。こいつのほうも隠すどころかローブに擦り付けてくるからやっぱり相当サノヴァビッチ。
「いたい」と半泣きで呟く見かけを裏切る高い声。赤く腫れるくらい強く弄る胸先。
ふっと、胸が痛くなるくらい可哀想になって、指をまだ柔らかいままの後ろに突っ込んでやった。脚の上の大きな痙攣。胸がちりちりする。
「ん…」
誰も聞いたことがないような声をあげて背中の蛇がくねる。左手を外し、一緒に入れてきた。
狭い腸が、三本の指を思い切り締め付ける。
「おまえが、さわるなんて…めずらし…っ」
「気持ち悪かったら抜くけど」

返事の変わりに直腸の締め上げ。
「い、から…も、…拳ごとつっこめよ…」
「死ぬぞお前」
「しんでもいい」
指を引き抜いた。纏わりつく感覚にぞくりとなる。
「フィストファックは自分じゃできないからなぁ」
「やろうとしたのかお前」
子供みたいにこくりと頷き、腰を引き上げる。標的を狙う時と同じ目をして、キャロルは口を開いた。こんな眼のときはやばい。ほっといたらあとで何をしでかすか、俺でさえ分からない。
四本の指を差し込んで、少しずつ奥に入れていく。縁は熱を持っていて異様に熱い。見たら、きっと真っ赤になっているに違いない。親指の付け根、一番太いところが入るとき、やっぱり苦しいのかキャロルは息をつめて背をそらした。
柔らかい腸内。これ、やってるほうはそんな気持ちよくないんだけど。あくまでも受動者優位な性技。いつでもそうだ。キャロルは貪欲に自分の利益を確保しようとする、馬鹿に見えて計算ずく。
「大丈夫？」
「う…ん、いい…」
勝手に腰を動かそうとするから、自身を撫でて宥める。力が抜けた隙に、指三本で前立腺を擽った。
「あ…！そこ、も、と」
そこばっかり集中的に突くと、子供みたいにぼろぼろ涙を零してしゃくりあげる。動かしたりまわしたり。締め付ける感覚は痛いほど。
「ジュノ…！きもちい、しぬ、俺、しぬって！」
肩にかじりつく強さ。ふわりと鼻をつく汗とフレグランスがごっちゃになった匂い。お呼びじゃないのに、あまりにも近くに感じていたものだから、不思議なくらい気にならない。
ぐちゃぐちゃ粘質的な音が聞こえる。太股を伝っていろいろな物が流れ落ち、シーツにまた更なる染みを作る。膝が力を失い、肩にか

かる重さはますます増えてきた。見かけよりは高い声で、キャロルはずっと吐息を漏らし続けている。
「や…もっと」
白濁でどろどろになった自身を俺のローブに押し付け、本格的に最後目指して駆け抜けようとする。ふらふらと顔を持ち上げ俺の顔に焦点を合わそうとする。唇の動きだけで、俺の名を呼ぶ。快楽に純粋で、白痴的にけなげ。苦しくて、苦しくて、伸ばしてきた舌をエスコートし、息ができなくなるくらい激しく絡めた。

ごめん、キャロル。どこまでも冷え切ったままの俺が、ベットで淫楽に耽る俺たちを天井桟敷から眺めている。小さいころから、人なんて信じるもんじゃないと教えられてきた俺たちは、こんなふうに恐る恐る身体を合わせる。人から奪ってばかりのお前と、無気力な俺。似合いといえば似合い。でも、時々泣きそうになる。
俺はお前が好きなんだろうな、多分。確信が持てない。ただ、俺をベッドに引きずり込むお前のほうが大体1インチくらい余分に俺を好きでいるんだろうと思う。
口の中で俺の名前を何度も呼んだあと、金縛りに逢ったみたいに身体が強張って。唇が離れる。そして、安物のローブ越しにじわりと広がる温かさ。
「ぁ…ぁ」
完全にぶっ飛んだ目に映ってるのは天国か？
少し腫れた眦からまた涙が滑り落ちて、それから本当の絶頂。射精。約1分のドライ・オルガスムス。
結局3Pはやらなかった。
3分間俺に寄りかかって放心していたキャロルは、掌を抜いた時身を震わせて漸く顔を上げた。もう顔には生意気な笑顔が戻ってきている。
「よかった」
「失禁するほどだからね」

「男冥利につきるだろ？」
身体を起こし、さっさと俺のローブを捲り上げ、緩く立ってるところに顔を埋めてしまう。
「っ…」
男に銜えられてイくなんて、あんまり見られたもんじゃない。
「その顔、ゾクゾクくるんだけど」
舌を出しながら、キャロルは笑った。俺の舐めながら自分の下肢に手を突っ込んで慰めてるお前の方が大概卑猥な気もするけど。
「なぁ、今度突っ込ませろよ」
「よく言うな、それだけアナル緩々にしやがって」
言った途端歯を立てられ、背筋に電流が走った。
半分は飲み込んで、半分は顔に直撃。その顔で上目遣いはやめろ。
なんだか危ない感じがプンプンする。
「シャワー浴びてくる」
言い捨て、裸のままぺたぺたバスルームへ去っていく。相変わらず死んだような少女。入り口で振り返ったキャロルの流し目。
いろいろな液体でずぶ濡れのローブを引っ掛けたまま、俺も仕方なく立ち上がった。

これは初めてベッドを共にしたときからそうなんだけど、夜寝るときは必ずキャロルが俺の腕に頭を乗っけて眠る。目を閉じたら、長い睫や白い皮膚から、童顔が更に引き立つ。乳離れできていない子犬みたいに擦り寄って、小さな寝息を立てている。これを見るたび、苦しいような痛いような、それでも歯がゆく釈然としたような、そんな気持ちになる。
起こさないようにそっと腕を外し、ベッドから降りる。ハンガーに吊るしたスーツを引き出し、着込む。
ベッドの下で倒れている少女を見た。肉付きは…悪くない。瞳孔を

確認する。まだスピードが効いていた。この分なら、影響はない。
汚れていないシーツで裸体を包み、持ち上げる。軽い、まともに物も食わしてないんじゃないか。

時計の針は3時前。今からいけば間に合うだろう。
部屋を抜け出し、フロントで鍵を受け取る。客が何しようと知らぬ振りするところは一応教育がされているということか。
少女をビュイックの後部座席に押し込む。ここからなら30分も掛からない場所へ、連れて行く。礼儀上、電話だけはしておく。いつものごとく留守番電話だった。
「今から頼みたいんだけど。金は全部あげるから。10代女、見たところ喫煙歴なし、衰弱してるけど内臓器官に影響は来てないと思う」
胸がシクシク痛む。後ろは絶対に振り向かない。
仇を討ちたいのはよく分かるよ。けど、自分からプロの世界に踏み込むのは絶対に止すべきだった。レオンみたいな連中ばかりとは限らないんだよ。散々ひどい目にあって、挙句の果てにこうやって臓器売買に引き取られるのがオチだよ。
胸が痛い。吐き気がする。早く、帰りたい。

「お前の方が数倍酷いだろ」
シーツから目だけ覗かせたキャロルの笑いを抑えた声が部屋に響く。
「ほかにどうしたらよかったんだよ。いつまでも飼っとくわけには行かないだろ」
「認めろよ、自分のこと」
無視を決め込む。
「ま、そこがお前のいいとこかな」
ごろごろと昼間中ベッドにいるこいつとは違って、俺はボスに直接

話を通しにいくってアポを取ってある。眠くて仕方がないが、今から車を飛ばして家で着替えないと間に合わない。
「なぁ」
部屋を出る前、甘えたガキ大将の声が背中を掴む。
「また来るんだろ？」
来なければならない自分にむかつく。その気持ちを精一杯表現するため、何も言わずに部屋を出る。笑いたくば笑え、同じ穴の狢め。

穴だらけのココロ

「俺のことは、もうかなり話したよな」
クッションを抱えソファに寝転んだまま、キャロルは唇を尖らせて見せた。仕方がないからクリーナーで磨き続けていた双眼鏡のレンズから眼を離す。視線を投げかけた先でごろりと半回転し、仰向けの姿勢から言葉の続きは紡がれる。
「だから、おまえのこと」
「知ってるだろ」
再び眼を手元に落とし、ジュノは言った。
「俺はゲイシャとブシドーの国で生まれて、おまえと同い年。これだけ分かってりゃ、十分すぎるくらいじゃないか」
「十分じゃない」
キャロルは片手を伸ばしテーブルを叩いた。昼食代わりの冷凍グラタンについていたプラスチックスプーンが飛びはね、合成樹脂の天板を汚す。
「俺ばっかり話してるじゃねえか」
「お前が勝手に話したんだろう」
至極真っ当な事を返してやれば、キャロルは赤くなった指先をそのまま口元に持っていき、眠くなった子供のように指先へ押し付ける。整髪料をつけていないから前髪は素直に垂れ下がり、その顔つきを普段にも増して幼く見せていた。中指の爪を噛みながら、暫くじっと睨みつけてくる。背中で感じ取れるほどの気迫は篭っているものの、いつもの鋭さはないと、ジュノはタカをくくっていた。だから彼がいきなり大声で仕方ねえ、と怒鳴ったときは、思わず爪の先で仕上げの段階に掛かっていたレンズの表面を思い切り引っかいてしまったほどだった。
「俺が質問するから、おまえ答えろよ」
「いつからおまえ、そんな好奇心の塊になったんだ」

レンズを睨みつけながらジュノは言った。
「余計な事は聞かないっていうのが俺たちのセオリーじゃなかったか？」
「別におまえの事なんか知ったとこで、どこからも銃弾が飛んでくるわけじゃないだろ」
落ち着きなく再び身を翻し、スプリングが半面壊れた座面に頬杖をつく。
「それに、前々から聞こうと思ってたし」
「前々って」
「そだな。お前が横で寝ててもぐっすり熟睡できてるって気付いてビビった日あたりから」
無邪気といえるほどの声色と共に身を乗り出し、床に転がったままのハーシーチョコレートに手を伸ばす。
「俺たち、心身ともに／パートナー（相棒）／だろ？」
包装を破く細かな音を苛立ちの元にしないよう理性で宥めながら、ジュノはまた布切れにワックスを付け直し、嘆息を漏らした。
「分かったよ。頼むからその馬鹿でかい声を出すのはやめてくれ」

「うん。まず」
足元に腰を下ろしたジュノの後頭部に指先で触れながら、キャロルは首を傾げた。
「聞きたいことは一杯あっけど、まずは、よく電話かけてる」
「ダディのこと？」
「そ」
「いきなりそこからか」
ジュノは苦笑を漏らした。均一に刷り込んだワックスはようやく満足の行く仕上がりに近づきつつある。あとは乾かしておけば問題ない。あまり利かない暖房の微妙な空気の下に放置しておけば、数時間で乾くだろう。あと二、三日は仕事もないから、細かいメンテナ

ンスはまた今度でいい。
テーブルの上に双眼鏡を立てかけてから、膝に顎を乗せ、少し俯く。
「ダディはダディだよ」
「でもおまえ」
キャロルは不満と、そして少しの遠慮を込めて一度言葉を区切った。彼は、双眼鏡のケースの底にしまいこんである一葉の写真を何度も眼にしている。ジュノ自身は口に出すことがなかったが、その中に納まったあどけない表情の自らと、静かに微笑む男の姿に、相棒が興味を示していることは、とっくの昔に察知していた。
「人種が違うからおかしい？」
こちらから問い返してやれば、素直に頷く。顔面を調節出来ない熱風にさらし、どんどん皮膚が乾いていくのを感じながら、ジュノは出来るだけ自然な口調で答えた。
「ダディはキューバ人。小さい頃カストロに追い出されてこの国に来たって聞いた」
「おまえ、ハーフだっけ？」
「いいや。話してやるから大人しく聞けよ」
知的で温和な顔つきと、深い声。掻き立てられる郷愁には、もう慣れた。自嘲を込めて噛み締めるだけに留めておく。
キャロルが真剣に耳を傍立てていることを確認する。ジュノは少し擦り寄ってきた体温に後頭部を乗せ、ゆっくりと言葉を継ぎ始めた。

俺の親父は、海外駐在員っていうのか、要するになんかテレビの部品を作ってる工場の責任者だった。シカゴに来たのは俺が7歳のときだったかな。だから正直、日本の記憶なんてほとんどないんだけど。まあ、10歳まではずっと、普通のアメリカ人らしいことしてたよ。俺はね。親父たちはそうじゃなかったみたいだけど。
お決まりでさ、事業が失敗しちゃって。しばらくは頑張ってたんだけど、なんていうんだろう。うん、連帯責任って言うのかな。結局

駄目で、工場が人手に渡っちゃって。本国の会社にも怒られちゃって。どうしようもなくなったみたい。
日曜日にさ。マーケットに買い物行った時、お袋がしわしわの5ドル札くれて、これでお菓子買ってきなさいって。で、俺がサーティーワンに並んで、チョコチップアイスを買ってる間に、親父とお袋は見事、走ってくるループに飛び込んじまった。
親父とお袋がトマトみたいになっても、鉄道会社ってえげつないよな。事故の保証金払え、なんて。もちろん日本の身内じゃ払いきれるような額じゃなかったし、俺は児童保護施設に連れて行かれて、将来仕事をして返せ、だなんて。
ところが捨てる神あれば拾う神ありって、日本では言うんだけど。金を全部払ってくれたし、あまつさえ俺を引き取ってくれるって人が出てきたんだ。あしながおじさんみたいな人。それが、ダディ。とてつもない金持ちだった。奥さんの実家が事業をやってて、よくあるじゃないか。凄い敏腕経営者。俺は経済とか経営とか、よく分からないけど。
親父の会社を吸収しちゃうくらいなんだから、よっぽど凄い切れ者だったんだろうな。

ダディには娘が三人いた。ダディの奥さん、母さんも、みんなそれなりに可愛がってくれた。いい家族だと思う。ダディは優しくて、でも、いつも耐えてるような人だった。それなのに、俺のことを一番可愛がってくれたのはダディだった。

「だから、『家を飛び出して交響楽団に入るための修行をしている一人息子』は心配させないように時々連絡をいれる。そういうこと」
「おかしいだろ」
言葉が完全に途切れた瞬間、キャロルは真面目な顔で言った。首を傾げるジュノに更に言葉を続ける。

「そこで終わりとか」
「何がおかしい？」
ジュノは眼を閉じた。
「それだけ。家族の話は」
「そんな居心地のいい場所なら、どうして飛び出したんだよ」
頬を膨らませながらの呟きが、生ぬるい空気に消える。
「家にいりゃいいんだ」
「だってさ」
膝頭に頭を擦りつけ、唸る。普段は極力、無を装っている顔が、少しだけ歪む。
「だって、仕方ないじゃないか。一番恨まなくちゃいけない人間を好きになったんだから」
髪の先を弄ぶ指の動きが止まったことには気付いていたが、言葉が自然にこみ上げる。
「俺は彼を守ってあげたかったけれど、彼はそれを望んでいない。彼には愛する人がいる」
そこまでが、口に出来る限度だった。強烈な理性がストップをかける。
「俺が出来るのは、身を引くことだけ」
これ以上は言わない。言えない。

自分の心はあまり見ることが出来ないし、知りたいとも思わなかった。そこに何かがあるのか、何もないのか。
背後で黙り込んだキャロルが哀れだとぼんやり思いながら、ジュノは少しだけ、自らの殻に閉じこもることにした。向こうから話を振ってきたのだから、それくらいの権利はあるだろう。そうは考えたものの、やはり後味の悪さは消えなかった。

＊青空に取り残された白い雲

それは近親相姦って言うんじゃないか、と呟いたキャロルの髪を掴み、枕に押し付けてしまえば、シーツの奥から苦しそうな鼻息が漏れる。

「馬鹿いえ。ダディはもっと綺麗な顔してるし、頭もいい」

それにおまえみたいなマゾじゃない、多分。

窒息しかかっているのだろう。キャロルは腕をばたつかせ、本気の声で抗議する。そんなに暴れたらますます酸素が減るのに。けれど彼が苦しめば苦しむほど、まだ一度も達していないジュノのものを咥え込んだ場所が引き絞られる。その刺激に持っていかれないように一度息を詰めてから、動きの弱まってきた頭を引き上げる。はっ、と苦しげな息で必死に空気を吸い込む唇から、唾液が伝う。

「殺す気かよ」

荒い息の合間から問うキャロルの瞳は、こちらに首を捻った途端微かに怯えの色を入れる。あまりにも無表情なジュノの顔つきに恐れをなしたのだろう。安心させてやりたい、と思ったが、凍り付いてしまった自らの顔の筋肉を動かすことが出来なかった。

「ごめん」

なんとかぎこちない声で謝る。猫が伸びをするような体勢のキャロルは、シーツを掴んでいた指の力を少し緩め、同じく戸惑いだらけの口ぶりを作った。

「明日、槍でも降るんじゃないか」

セックスのとき、ジュノは絶対に謝罪しない。分別を持つ彼は、どこまでのめりこもうとしてもきちんと限度を知っていたし、そのぎりぎりのラインでいたぶられる事をキャロルが好むのだと、重々承知していたからだ。

テロリスト（といえば本人は革命の戦士だと必死に抗議するが、どちらにしろ正義ではない側で人を殺していたことに違いはない）と

して活躍していた頃つけたらしい傷跡が、熱を持った白い肌のそこかしこに浮かび上がる。脇腹から背中にかけてうっすらと引かれた線を人差し指で撫でてやれば、びくりと体が揺れる。不安そうなまの眼差しから、自らのものを従順に飲み込んだ場所へ視線を落とし、乱暴に腰を進めれば、油断していた喉からあどけない声が漏れ出した。前立腺ばかりを集中して突いてやれば、すぐさまキャロルは苦痛を耐えるような恍惚を復活させ、赤い舌を歯の隙間から覗かせた。数々のサバイブにより分厚い筋肉に覆われた体は間違いなく男で、けれどそれを裏切る子供のような顔立ちが熱により溶けはじめ、一層表情を幼く純粋にしていく。とうとう腕が耐え切れず、シーツに突っ伏したキャロルは頬をシーツに押し付けながら、浅い息と意味をなさない言葉を延々と吐き続ける。時々、ジュノ、と回らない舌で挟み込まれるたび、ジュノは今自分がだれに突っ込んでいるのかはっきりと思い至る。

こんな空虚さを感じていいはずがないのに、覚醒すればするほど心が引き攣れるように痛かった。
少し長めの襟足が、白く太い項をぱさぱさと叩いているさまを見ているうちに、やっとのことで理由に思い至る。

中に自身を残したまま、動きを止める。汗まみれの顔を向け、不思議そうに身じろいだキャロルの身体をひっくり返す。回転するように擦られる感覚に、高い声にあわせて腹筋が波打つ。されるがままになっている両脚を抱え込み身体を折り曲げ、お互いの胸が触れ合いそうな位置まで身を近付けると、接合が深くなりまた喘ぐ。ぐちゅりと粘着質な音と共に、隙間から腸液とジュノの先走り、少し多めに入れすぎた潤滑油が太腿の裏側を伝う。その感覚にすらも感じているらしく、キャロルはふるりと身を震わせ中を締め付けた。
動くこともせずまじまじと顔を見下ろしても、キャロルはしばらく至近距離の黒い瞳から目を逸らしたままだった。頬を紅潮させたま

ま、濃い眉を八の字にして、小さな唇を噤んでいる。顔全体をめまぐるしく駆ける羞恥をとくと観察しながら、ジュノは根気よくキャロルが顔を上げるのを待った。
勝手に顫動し、中のものを咥える自らの直腸に音をあげ、とうとうキャロルは、ゆっくりと伏せていた眼を持ち上げた。初心な娘のような表情は、一点に定まった途端ますます悲しみの色を湛えた。
「泣くなよ」
ベッドに爪を立てていた手をそろそろと持ち上げ、真上にある頬に触れる。途方にくれた子供の動作をする指に目元を辿られ、ジュノは初めて自らの顔が歪んでいる事を知った。
「泣くなって」
「泣いてない、泣いてない」
「泣きそうじゃん」
「気のせいだ」
「なんで」
キャロルは悔しさすら滲ませて、自らぽってりしたジュノの唇にみずからのものを重ね合わせた。必死の動きにジュノが答えてやると、当初は大した目的も持っていなかった舌が激しくなる。伝う唾液と細めた先の眼が、昼の終わりの光を吸い込んでぎらぎらと輝く。
「なんで…俺、こんなに好きなのに」
本心からとしか思えない呟きに、ますます胸の傷が痛む。
動きを再開させて泣き出したのはキャロルのほうだったが、ジュノはただ、眼を逸らしていることしか出来なかった。

風になりたい

口をあけて、と言われたら反射的に眼を閉じてしまう。けれど最近、キャロルは出来る限り瞼をこじ開けようと、必死の努力を続けている。口腔内を覗き込むジュノの顔が思ったよりも真剣で、純真であることに気付いたのは、１週間ほど前偶然眼を開けたときだった。

「綺麗に磨けてる」

ジュノの言葉に歯ブラシを棚へと戻し、パジャマの裾を引っ張る。毎日歯を磨くのは昔からの癖だったが、服を着て眠るようになったのはジュノと暮らすようになってからだった。「どうせすぐ脱がすのに、面倒くさい」キャロルが言ったとき、ジュノは肩を竦めて返したものだった「脱がすのが楽しいんじゃないか」。今、キャロルが身につけているのはパジャマの上だけ。下は、先ほどシャワーを浴びたばかりのジュノが穿いている。暖房よ、栄光あれ。こんな季節に上半身ないしは下半身むき出しでも、寒さを感じることはない。ボクサーショーツからはみ出した脚で跨いだ太腿を締め付け、キャロルは往生際も悪くまだジュノの膝の上に居座っていた

「どきなさい」

「やだ」

拗ねながら、下半身をジュノのそれに押し付ける。けれど今日は、彼は相棒を抱く気はないようだった。ため息をつき肩に乗せられた手首へ宥めるように口付けを落とす。

「だめ。今日はもう寝る」

「なんで」

「おまえ、明日仕事だって忘れてるだろう」

あ、と呟いたキャロルにやれやれと首を振り、性的な要素を一切含まない口調で腰を抱えてやる。密着しても、やってきたのは温かさだけだった。自分よりずっとウエイトのある人間を膝に乗せても辛い顔一つ浮かべないところは、さすが男と言うべきか。キャロルも

ジュノの首へかじりつくように腕を回し、こめかみの辺りに唇で触れた。ジュノは薄く微笑み、尾てい骨のあたりを優しく叩く。
「覚えてる？」
「んーん」
「3日前に写真見せただろ。背が高くて、がっしりとした体格の、スロバキアか何かの男。空港で飛行機から降りてくるところを。射程距離は1．2キロってとこかな」
「じゃ、楽勝だ」
見かけから想像するよりもぐっと低い声が胸元へ吐かれるので、くすぐったくなり軽く身を捩った。腰を抱く手は相変わらずで、こら、と小さく呟き、ジュノは益々上に力を込める。
「他にも人がいるから、撃ち損じるなよ」
「大丈夫だって。俺の腕、信用してないのかよ」
「してるけど、万が一ってこともあるだろう」
それに明日は寒いから、との言葉にじんわりと温かくなった胸を、ジュノの鼻先に押し付ける。
「今のとこ、俺が失敗したことなんてないじゃん」
ふう、とぬくい息が鎖骨のあたりにかかり、擽ったい。
「そうだな」
確かにその奥へ、ジュノはとてつもない渇望を押し隠している。キャロルが常に眼をぎらつかせ、求め続けているのとは一見正反対に見えるが、本質は何一つとして変わることがない。
けれど、時々耐え切れずあふれ出てしまうときを除き、ジュノはまるで何も変わらない石造のように静かで、平穏だった。皮肉を常に纏い、それなのに、今こうやっているときのように、優しさは限りない。
ささくれ立っていた感情が、ほんの少しだが鎮められるを、ここ数年キャロルはひしひしと感じていた。ジュノにとってキャロルは、たまたま店で見つけたテディ・ベアくらいの価値しかないのかもしれない。キャロルにとって、ジュノが巨大なユグドラシルの樹であ

るように。それはありふれたように見え、いつでも捨てられると思いつつも、実際問題としてなかなか離れられない。「かもしれない」という言葉の正当性はとうの昔に知っていたが、今回だけはキャロルも「そうであるべきだ」という言葉の魔力を必死で信じたいと思っていた。

こうやって抱き合っているだけで満たされるなんて、アイルランドにいた頃は思いもしなかった。

「ジュノ」

「うん？」

「好き」

身を凭せ掛け、顔が見えない状態で呟けば、ジュノは微笑んだらしかった。耳朶にあけたピアスの穴の淵をゆっくり舐め、更に腰を引き寄せる。

「俺も、だよ」

もうそろそろ寝よう、という言葉に性的な意味はない。日付が変わっている。後6時間したら眼を覚まして、生産とは正反対にある行為を行いにいかなければならない。

けれど、平気だとはっきりいえるのは、帰ってくる場所がしっかりとあるからだった。

額を甘噛みすれば、苦笑が返される。

「食いたい」

「いつからアマゾネスになったんだよ」

「アマゾネスって人食うの？」

「多分」

「何でもいいけど。食いたい」

身の中に収めてしまって、一つに溶けあえたらどれだけ幸せだろうと、キャロルは自分でもまともではないと分かる思考の中で願っていた。だからセックスをするのかと、こじつけは困った事にぴったりと噛み合った。たとえ吐き出されたものでも、体に残しておきた

い。それでいい。もし自分が妊娠して、ジュノの子供を産んだとして、その子がジュノにそっくりだったら、きっと信じられないほど溺愛するに違いない。逆に自分に似ていたら、マンションの屋上から突き落としてしまうだろうが。

「なんか、今ほど女になりたいって思ったことない」

「前にも似たようなこと言ってなかったか？」

あやす手つきが離れ、立つように促される。しぶしぶと膝から降りたキャロルの手を借り立ち上がると、ジュノはそのまま彼と手をつないだまま離そうとしなかった。

「寝よう」

そのままベッドへ誘われるのだと知って、キャロルは思わず涙ぐんでしまった。幸いジュノは気付くことなく、反対側の手でドアを押しただけだったが。一つのベッドに身を寄せ合い、また抱き合えばいい。それが可能なのだ。この状況ならば。そのために、毎日のように人を殺す。罪悪感なんて端からなかったはずなのに、何故かキャロルは、胸の奥がちくりと痛んだのを感じた。その響きも、優しい手つきにすぐ消えてなくなったが。

「おやすみ、あなたにもわたしにもよいゆめを」

いつか消えていくけれど

「やあ、ジョ……いや、ここではジュノか」
ボスの部屋から出たところで声を掛けられた。耳慣れた高い声を無視し、ジュノは細長い廊下へ歩みを向けた。慌てて追いかけてくる足音に、眉間の皺が更に深まる。
「そんな拗ねるなって」
「拗ねてません」
「お前が敬語使うときは、機嫌の悪いときだけだからな、昔から」
「あんたが原因なんだよ、リンドン」
くるりと振向き、大仰に肩を竦めるリンドンに向き合う。目の前にあるのは、あまりにも不敵な表情。仕方ない。２０も年が離れているのだから、余裕も場数も違う。
「そんな怒らずとも、いいんだぜ、呼んでくれても」
癇に障る笑みを口の端に乗せて、リンドンは言った。
「”父さん”って呼んでくれても」
握り締めた拳を辛うじて太腿にくっつけることで抑え、歯を食いしばる。
「俺にとって父親は二人だけ」
歯の隙間から吐息と共に押し出すようにして、ジュノは言った。
「産みの親と、あんたが追い掛け回してる男性だ」
「追い掛け回してるって、言葉が悪いな。とっくの昔に」
指を持ち上げる仕草に吐き気がする。

どうしてダディはこんな男と。

家によく遊びに来る”レイおじさん”はダディの幼馴染。ハンサムで、気前が良くて、優しい。クリスマス、プレゼントの山に手を伸ばす血の繋がらない姉たちから一歩離れ、どこか居心地が悪そうに

立ち尽くすジュノを抱き上げ、頭を撫でてくれる温かい手。『分かる分かる』膝の上に乗せて優しく囁いてくれる言葉は、ほんの少しだが、確かに慰めとなった。『無理に馴染まなくても大丈夫だ。おまえは、おまえなんだから』
そして、人気のなくなった居間をこっそり覗いたある年の聖夜に、あっけなく潰れる幻想。こっそり持ち込まれたプレゼント。酔いつぶれて寝込んだダディをそっと抱き寄せる腕。サンタクロースはいない。ダディの一番は自分じゃない。
「昔はあんな素直だったのに」
「どうして素直じゃなくなったか、胸に手を当てて考えてみればいい」
お決まりの文句。それすらもリンドンは楽しんでいる。圧倒的な差を感じさせるその余裕が大嫌いだった。年齢的経験も、人を殺す技術も、そして何より向けられる愛情も。
「あんたは昔から何も」
変わりはしないことは、ジュノ本人が一番良く知っていた。こんなくだらない嫉妬に巻きk間レルべきではない事も。事実は事実、認めなければ。理性は騒ぐが心は一向に許そうとしない。思考の堂々巡りはまた苦しさを産む。涙が出そうだった。
「最近あんた、父さんのところに行ってないだろう」
俯き、しょっぱさを飲みこみながら言葉を紡ぐ。
「寂しがってるから、会いに行ってやれよ」
ああ、それにしてもどうして、どうして。
「分かった」
心得顔で返すリンドンの顔を見ることが出来ない。
どうして俺じゃ駄目なの、ダディ。
まだ燻り続ける胸の奥を必死で噛み潰しながら、ジュノはひたすら足を速めた。

＊壁に映る影（前書き）

ジュノのダディとＣＮリンドンの因縁の話。性描写が強いので、１５歳以下の人は見てはいけません。

＊壁に映る影

ぼんやりテレビを見ていたらいきなりキスされた。どうしようもなく自然な動きで。横に座って同じように映画を見て（マイケル・ダグラスは嫌いだとビデオテープをデッキに入れる前からレイモンドは宣言していたが、映画の面白さは認めざるを得なかったのか、ポテトチップスを口に運びながらテレビに釘付けになっていた）気がついたら口の端に掠めるような口付けを。男なのに、非常に手入れのされて柔らかい唇だった。

焦点が合うくらいの距離まで離れた顔をまじまじと見つめるアンドルーは息を詰めていた。独特の端整さ、澄んだ湖のように蒼く大きな瞳に見つめられて、落ちない女なんているのだろうか。実際酒の肴で武勇談を聞かされ苦笑いしたことも度々で、それはまた勉強に明け暮れていた自分の青春とは余りにもかけ離れており、小さな羨望すら抱かせたこともあった。

理解できない頭でじっと見つめ返すと、低い声でレイモンドは何か言えよ、と呟いた。背凭れに乗った腕はこちらの領域にまで迫っていて、半分近く覆い被さっているような体勢だった。こんな状態で何を言えというのか。聡明なアンドルーの頭脳は、彼の虹彩の中心にあるのが欲望であることをこの時見抜き、同時に自らの繊細な感性が熱を持ったのを感じた。

「何って」

緊張と戸惑いがない交ぜになり、舌の動きを鈍らせる。

「レイ、君」

「やっぱり言うな」

指先に力がこもり、合成皮革が小さく鳴る。

「イエスかノーで答えてくれ」

ノーと言ったら、彼は潔く部屋を出ることだろう。心配する必要は何もなかった。長年の付き合いでアンドルーはレイモンドのことをちゃんと信頼していたし、これからもそうであろうと確信していた。なのに、この動悸は。

少し震えて、アンドルーは俯いた。理性が叱咤する。こんなこと、余りにもはしたない。迫られてすぐ頷くなんて、尻軽女じゃあるまいし。それに彼は男で、何よりも親友だ。まだ野球バットを振り回していた時代から知っている。

けれど理性が感性に勝てるわけもなく、もともと伸びやかな芸術家の要素を持ち合わせる彼の心は、あっさりと挫けそうになっている。好奇心と、好意。これは友情なんだと思いながらも、気付けば顎は持ち上がり、先ほどされたことを真似て、目の前の下がり気味の口角を舌先で舐めた。

可哀相なくらい緊張していたレイモンドの表情が緩み、笑みの形になったのは唇で知った。すぐさま答えるように、今度は唇を触れ合わせる。慎重に、けれど手馴れた動きで舌が押し付けられるから薄く開けば、今まで付き合ったどんな女よりも巧みに動く。舌も柔らかいし、優しいくせに翻弄する要領のよさ。気持ちよくてぼんやりしてしまい、気付けばアンドルーはレイモンドの唾液を飲み込んでしまっていた。少し驚いたが、思ったよりも違和感はない。口の端から溢れた残りを勿体無いと思ってしまったほどだ。追いつこうと懸命に自らも舌を動かしていたら、そっと横たえられる。すっかりソファに乗り上げる格好になると、古いスプリングが小さく音を立てた。すぐさま追いかけるようにしてクッションについていたレイモンドの手が持ち上がり、Tシャツの上からそっと胸元を撫で擦った。心臓の上に指先が来た時、大きすぎるこの鼓動が伝わっていたらどうしようとアンドルーは一瞬羞恥した。流石に女とは言わないが、しっかりと筋肉がついた胸を這う手は触れるぎりぎりの位置をさ迷ったり、柔らかく撫でたかと思えば突然荒々しくなったりと忙

しい。ふと口を離し、もう片方の手も添えようとするレイモンドを見上げる。いつにも増してまん丸な瞳は数度ぱちぱちと瞬きし、長い睫が薄い瞼に引っかかりそうになる。

「会う男みんなに、こんなことを？」

「まさか」

本気で機嫌を悪くしたという表情で（拗ねた子供のそれだった）レイモンドは下半身を強く押し付ける。少し固くなっているそれに身を竦めると、途端に慌てた繕い笑いに変えて、気付けば潤んでいた目元にも唇を押し付けられていた。敬うような畏れるような、少しぎこちない動きだった。

「やり方は聞いたことあるけど」

くすぐったいだけだった掌の動きが少し変化したことに居心地の悪さを感じていると、指先が不意に乳首を摘んだ。女と寝る時は感じたこともなかったのに、直接的なものだけではない痛みが首から下に走る。自らの下半身がぴくりと反応したことに赤面し、逃げようと腰を引こうにもクッションに押し返されるだけだった。

「お前は？」

布と敏感な先端が擦れる感覚は痛い。いや、痛みだけではない。

「その、だれかと経験あるとか」

この場にそぐわないことだと自分でも分かっていたが、アンドルーは怒るよりも先に噴き出した。

「してない」

そっと、非常に勇気の居ることではあったが、レイモンドの肩に手を伸ばす。いちいち安堵の表情を見せるレイモンドを、アンドルーはとてつもなく愛しい存在に思えた。

「本当に」

再び指先に力が入り、今度こそははっきりと自覚した感覚に背をのけぞらせる。鼻声を漏らし、肩を掴む手に力が篭る。

「気持ち悪くない？」

「別に、大丈夫」
「じゃあ、どうだ？」
大真面目なのか馬鹿なのか意地悪なのか、目を閉じてしまったアンドルーには分からなかった。染まった頬が照れ臭く、少し顔をそらしながら答える。
「きもちいい」
首筋にやわく噛みつかれたら、びりりと電流が走る。食べられる、というのは初めての感覚だった。そのまま耳元まで唇はゆっくりとラインを辿り、耳朶を甘噛みされる。女にするようなことを自分にしているのかと思えば妙な気分だったが、聞きなれた少し甲高い声を精一杯低めた吐息が刺激すると、肩を震わせるしかない。
「良かった」
ふっと離れていったところに冷たさを感じる前に、捏ね回されシャツの布地をくっきりと押し上げていた乳首に唇が降りてくる。赤ん坊にするように舌を絡めて扱くように吸い付かれ、布越しの柔らかさと押し付ける動きにアンドルーは唇を噛み締めた。
「声、聞きたい」
ハーレクインの台詞のような言葉は現実に聞くとくすぐったかったが、撫でる指先は熱い。綻んでしまった唇から断続的に呻きを漏らし、アンドルーはレイモンドの頭を抱え込むようにして胸を押し付けた。
「んん、あ、レイ、ねぇ」
「もっと？」
「……もっと……」
唇が反対側に移ると、今までしゃぶられていた場所を再び指先が這う。唾液で濡れた場所はごわごわと違和感があり張り付いている布を引き剥がすようにして一緒に先端を摘んで引っ張られると、思わず喉が開いて甲高い声が出た。
「あ、ぁ、や、いた、い」
「痛いだけ？」

「わ、からない、よ……」
「嘘つけ」
「やぁぁ」
敏感になった先端に歯を立てられたとき、身体が激しく痙攣する。信じられない、こんなこと。
既に荒くなっているレイモンドの息に恐れを抱く暇もなく、シャツを捲りあげられて同じように舌が這い回る。ぬるりとした感触のリアルさに頭を仰け反らせ、じわじわとあふれ出てくる涙は止まらない。
「あっ…レイっ」
「怖いか？」
「どうしよう…俺…」
なぜあんなにも気軽に許してしまったのだろう。奔流は思ったよりもずっと激しかった。
「こんな風になるの、しらなかった」
潤んだ瞳で見下ろせば、一瞬表情を強張らせたレイは身体を伸ばし、噛み付くように口付けてきた。目を閉じ、溢れた涙で溺れかけているアンドルーは、増幅され続ける独占欲に恐れおののき、混乱し続けていた。首を持ち上げ自ら積極的に舌を絡める。
「好きになった」
唇を離しざま、必死に呟く。
「どうしよう」
縋るように視線を合わせると、レイモンドは見開かれた眼でこちらを凝視している。
「レイは？」
「遊びで男襲うわけないだろうが」
吐き捨てるように言いながら、シャツを脱ぎ捨てた指先が焦りで震えている。まだ震え竦んでいるアンドルーも何とか脱がせてしまい、気がつけば下着一枚の姿にされていた。ダイレクトに直接自らのものを握りこまれ息を飲む。

「おい、ちょっと」
「今更待ったとか言うなよ」
強引に、まるでやりたい盛りのティーンのように息を切らしながら、レイモンドは力なく垂れ下がっていたアンドルーの手を逆の掌で掴んだ。
「おまえも」
押し付けられ恐る恐る触れると、途端に固さを増す。嫌悪感よりも、自らがされていることの羞恥で死にそうになる。震える指先でファスナーを下ろし下着越しに触れると、レイモンドは可愛らしいとすら思える吐息を出した。すぐにそんなことを考える余裕がないほど、手つきは荒っぽくなり、急速に高められる。
「ん、んんっ…あぁっ…レイ、や、まってっ」
すっかり疎かになった掌は押し付けているだけのような格好になったが、それでもレイモンドの自身は益々固くなっていく。混乱は益々深まり、涙交じりの声で名前を呼び続ける。
「レイっ…」
頭の中で稲妻が暴れまわるような感覚に身を捩り、膝でレイモンドの手を締め付ける。少し笑っているような声が聞こえ、頬は熱くなるばかり。押さえつけている方と反対側の手で彼の肩を掴み、呻きをあげる。稲妻が爆ぜ、拡散する。
「あ、ぁ…」
ずきずきする頭も痛みも収まったころ、太腿に張り付く下着の感覚に薄く眼を開き、眉を顰める。喉が渇いて乾ききった唇を何度も舐める。
「…ごめん…」
「気にするな」
下着に指を引っ掛けられた瞬間抑えようと手を動かしたが、弛緩した身体では間に合うはずもなくずるりと引き摺りおろされる。何も身に着けていない状態で思わず膝を立てたが、レイモンドは少し息を吐いて簡単に膝を割ってしまう。

「うん、その」
そこで止まる。眼をそらし、半開きの唇を何度か動かすが、膝に乗せた手はまだ動かない。
「続き、やっていいか？」
羞恥で隠してしまっていた顔を、腕の中から少し覗かせる。流石に、続きの意味が分からないほど初心でもなく、アンドルーはどうしたものか考えた。既にここまでの行為で恥ずかしさで死にそうになっていたし、最初は死ぬほどの苦しみだと聞いたこともある。というか、そもそもどちらが何をするのかさえ分からない。
「僕が入れられる方？」
「出来たら」
口の中でレイモンドは呟いた。
「というか、うん、頼む」
迷子のような表情で返ってくるものだから、哀れにすら思えてしまう。初めてとは嘘ではないのかもしれない。アンドルーは深く息を吸い込み、頷いた。
「分かった」
無論、顔を隠してだが。かっと、また熱があがる。
とんでもないところに伸びてきた手が、そっと窄まりを撫でる。気持ち悪さに肩を揺らすが、先ほどの怯えとは裏腹に、戸惑うことなく行為は続く。指先が一本、中に押し込まれたときには流石に声を上げたが、アンドルーは健気にも歯を食いしばり、目を閉じていた。どうしてこんなことになったのか、動かない頭で必死に考えながら。
「力抜けって、力」
そっと腕を外され、唇が近づけられる。おずおずと返していた舌の動きに熱中し出した頃、指を深く突き入れられてレイモンドの咥内で唸る。引っかかれ、混ぜられる感覚に肌があわ立つのを悟ったのか、レイは顔を離し、深々と覗き込む。恥ずかしくてたまらなかった。
「やめるか？」

「ここまでやって」
アンドルーは首を振った。
「そんなことといわれても」
尖らせた唇に再び重ねられてから、指は一本増やされる。襞を解すような動きを拒むように直腸が収縮したが、その動きに身体が違う違和感を覚えて竦む。
「アンディ？」
答える前に、熱心に蠢く指の先が固いしこりを掠め、息を呑んだ。
「い、いまの」
悪寒にしては鋭利な背筋に驚き、アンドルーは腕を顔から外した。
「レイ…！」
また指は同じところを擦り、開いたままの口からは声が抑えられなくなった。
「や、あぁっ…い、いや、ちょっと…ま、って…あぁっ」
気付けば指の本数が増えていたことなどアンドルーが気付くはずもなく、無論レイモンドの息まで上擦っていることも分からない。電流を通され頭を殴られるような刺激はきつ過ぎて、苦しささえ覚えて喘ぐ。
「や、ぁ…もう…」
次にやってきた引き抜かれた感触と窒息しそうな苦しさと確かに感じた痛みは、混乱に紛れて幸いそれほどでない。
「う、あ…」
思ったよりも近い位置にいたレイモンドの顔を開けた薄目の下から窺えば、滲んだ額の汗と伏せられた長い睫に緊張する。苦しさと痛みはやっと追いつき、アンドルーは短い息を繰り返す。
「入った」
食いしばった歯をとき、レイモンドは言った。
「入ったぞ」
「なにが…？」
分かっているのに、アンドルーは聞き返した。レイモンドも答えず、

アンドルーを抱きしめた。身動きされたとき、また痛みが走り顔を顰める。
「やった…」
慎重に抱き返すと、レイモンドは少し笑っているようだった。耳元の吐息がくすぐったい。
「これで夢だったら、俺死ぬぞ」
「夢なもんか」
途切れ途切れにアンドルーは返す。
「こんなこと…」
汗とコロンの匂いは不快どころか安心すら呼び起こす。子供のように擦り寄ってくる身体に回した腕に力を込め、アンドルーは目を閉じた。痛みは少しずつだが、治まってきている。
「見たんだって、一ヶ月前」
レイモンドはまだくすくす笑いをやめず、アンドルーの耳を齧る。
「で、がっかりした」
「がっかり？」
「あんまり積極的だったから。実際は、そうじゃなかった」
深い吐息と共に、少し身を起こす。
「嬉しかった」
「なんだよそれ…っ」
動き出した腰は痛み、続きは言葉にならない。
けだが、痛みはそのうち快感に変わること。レイモンドの声はとてつもなく可愛らしかったことは確かだった。
結局レイモンドは、3日後に勤務先である社長の一人娘と挙式を控えているアンドルーに迫った理由を、最後まで口にしようとしなかった。

青草のフィールド

日曜日の公園は、この寒さにもかかわらず多くの家族連れや恋人たちで賑わっている。遊具らしき遊具などなく、ベンチと雑な手入れの芝生があるだけの広場だった。何もないからこそ、想像力を働かせる。平穏そのものの風景だった。思い思いに余暇を楽しむ人々を一望できるカフェテラスでコーヒーを啜るリックだけが、僅かにだが顔へ緊張の色を乗せていた。

「ヤバい、と思う」
神経質にこげ茶色の髪へ触り続けるリックの顔を、ジュノは当惑した顔で見つめた。
「そんな騒ぐ事じゃないと思うけど」
肩に寄りかかるキャロルへ同調を求めても、小さな鼻息しか聞こえてこなかった。バイオハザードなんか買ってこなければ良かった。ジュノも寝不足なことに変わりはない。しかし張り詰めた空気に囲まれ、仕方なく眼を覚ましている。
「Vが行方不明になった」
「なに？」
「V。知らないのか」
これだから尻に殻のついたひよこは、と肩を竦めるのを無視し、自らの手元のブラックコーヒーを引き寄せる。ひどく拙い淹れ方だが、とにかく濃いのがいい。こんなものでも飲んでいないと、確実に寝る。頬に当たる日の当たった砂場のようなコリンの髪の匂いを、モカがかき消していく。
「Vのしたことは数多いが、誰でも知ってることってなると・・・そうだな。何年か前シアトルで起きた暴動では、うちから二人のスナイパーが派遣されてる。一人は一般市民に向けて銃口を向け、市政についての反感を煽らせる。もう一人は逆に、警察を狙い彼らの

行動を正当化する。１８歳のデモ隊員を撃ち殺したのがＶで、武装してた警察官の頭を撃ち抜いて暴動のきっかけを作ったのがリンドンだ」
後者の名前に露骨な眉のしかめ方をするジュノをとくと眺めてから、リックはゆっくりと冷めたコーヒーを啜る。
「プライドが高くてちょっと変な野郎だったが、腕は大したもんだった。それがここ2週間、召集かけても音沙汰なし」
「グアムにでも行ってるんじゃないの？」
「それならいいんだけどな」
ぐう、と寝息だけで返事をしたキャロルに一瞥を投げつける。
「にしてもおまえ、甘やかしすぎじゃないか？」
「そうかな」
立たせた黒髪をなでながら、ジュノは緩く首をかしげた。
「その価値はあると思うけどね」
処置なし、ともろ手を挙げるのに微笑んでおく。
「自由恋愛さ」
「は、おまえが言えば説得力もあるな」
リックは唇を歪めた。
「妬けるな」
この世界に足を踏み入れたばかりで右も左も分からジュノに宛がわれた連絡員は、確かに親切だった。今もこうして、様々な情報を回してくれる。愛してもくれた。彼の明るい茶色の瞳が、怯える自分の瞳を覗き込むさまを、今でも思い出すことが出来る。「Ｅａｓｙ，ｂｏｙ」身を硬くした少年をベッドに横たえてやりながら、リックはいつでも言ったものだ。「おまえは本当に物覚えがいいな」蕩けるようなキスと、強引だが相手の隙を逃さず捕らえる愛撫を受けながら、ジュノはいつか自分が彼の立場になったときのためにその技術を覚えこんでおきたい、と考えていたものだった。そんな小賢しい思考は、それまで誰のものも受け入れたことのない場所を開かれるすぐに出来なくなったが。

いつのまにか自由になっていたジュノがキャロルと出会い、その手から離れても、リックは何も言わなかった。オデッサは自由を愛する都市だ。それが幾ら逸脱したものであったとしても。
「あの大人しくて細っこい少年はどこへ行った？」
「リック」
上手く笑えていることを祈りながら、ジュノは右手を差し出した。
「嬉しいよ」
自らのものよりずっと華奢なつくりの手を掴んで優しく引き寄せたリックは、その先端にそっと唇を落とした。
「とんだクソガキだ」
その顔こそが、まさしく自然の微笑だった。
「そろそろ行くよ。ボーイフレンドが待ってる」
「今度はどんな人？」
「気になるか？」
「なんとなく、ね」
「金髪で恰幅のいい、ちょっと初心な男。腕のいいスナイパーさ」
「うちの組織の？」
今度はジュノが肩を竦める番だった。
「どうしようもないね」
「かまやしない。自由恋愛だろ」
立ち上がった時に伝票を掴まないのは、一人前だと認められている証しだ。
「とにかく、上からもそのうち指示があると思うが、Ｖのこと」
「捜索？」
「ああ。ただでも物騒だ。おまえらも気をつけろよ」
少し後ろ髪を惹かれるような口調であることが嬉しい。
人ごみに消えていった後姿に眼を向けることなく、ジュノはまだ涎をたらしたままのキャロルの肩を抱いた。これでいい。そう素直に思えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8914i/

生まれついての

2010年11月16日21時36分発行